

**令和6年度
所有者不明土地等対策モデル事業
実施結果報告書**

令和7年3月

大島小学校区まちづくり協議会

(1) 業務の目的及び概要

① 業務の目的

一昨年に行った当事業の活動成果を引き継ぎ、この成果の中から特に課題となっている集落内の未利用空き地（棚田農地と集落内空地）の利活用と空き家とを組み合わせる相乗的な効果をもたらすような実践的な活動を行い、今後の未利用空き地の解消を目指す取り組みを継続化していくことで大島地区の地域再生につなげていくことを目的とします。

具体的には、伝統的棚田で休耕田が目立つ集落において、現在当会で来訪者に対して一時休憩施設として活用している空き家を活用しながら、昨年より当地区に就農している20歳代の若者たちの力も借りながら、当地区に興味をもってもらうようなPR活動を行い、空き家と農業体験が一体となった活動や集落内空地を活用したバザール等のとりくみを行って、移住人口や関係人口の増加を目指して、徐々に休耕田や集落内空地などの未利用空き地の解消を目指します。

② 対象地域名

大島地区 柏原集落、他

③ 対象地域の特性

当地区は、兵庫県猪名川町の最北部に位置し、全域が市街化調整区域で集落部以外のほとんどのエリアが県立自然公園区域に指定されており、都市近郊のきわめて自然環境が豊かな地域となっています。

一方、都市部から当地区までは車で数十分以内と都市部からのアクセスが良いがゆえに、近年人口の流出などにより少子高齢化の著しい地域となっています。

④ 対象地域（対象物件）の課題

当地区の空き地の課題に関しては、一昨年の当モデル事業では、A.集落内の未利用地（休耕田及び集落内空地）、B.当地区中心部の利用度が低い公園、C.不法投棄敷地、の3つを掲げましたが、B.に関しては当モデル事業によるモデル的な取組と利用方針を掲げたことによりその方向での利用促進が図られており、C.に



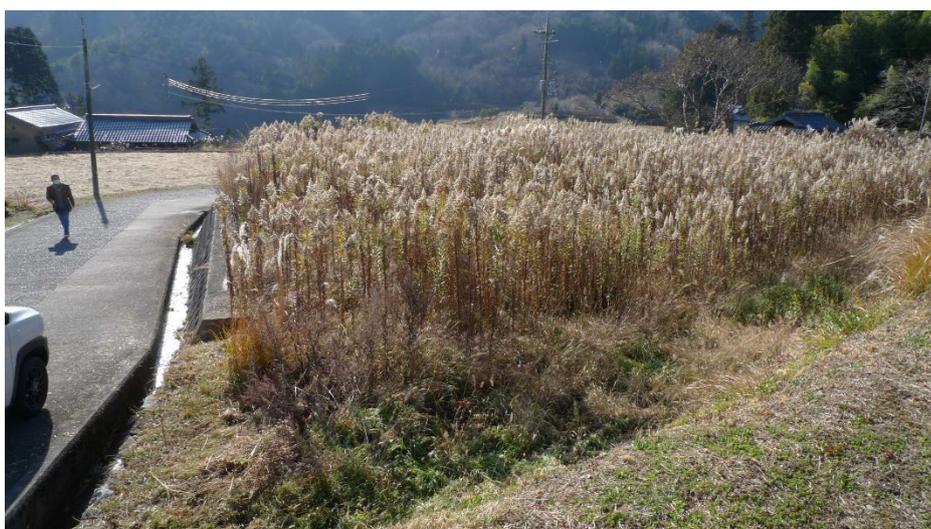
図表1 対象地域の位置

関しては課題解決までには相当の時間と労力を要することが判り、当地区として当面課題とすべきは A ということになりました。

集落内の未利用地に関しては、特に当地区北部集落において棚田等の休耕田や未利用空き地が目立っており、一昨年度の当モデル事業において“空き地（休耕田を含む）をサステイナブルに推進していくための構想「大島モデル」”を提示したところですが、これの実現化をめざして今回のモデル事業において具体的で効果的な実践をいかに行い、これを通して集落の空き地利用及び休耕田解消へ結び付け、地域再生を軌道に乗せていけるか、が課題となっています。



図表 2 大島地区柏原集落の伝統的な棚田風景。耕作面積が小さく、機械化に向いていないために休耕田が目立っている。



図表 3 放置されている休耕田にはセイタカアワダチソウや茅が目立っており、草刈り作業は相当の労力が必要となっている。



図表 4 柏原集落ではほ場整備が行われているエリアが地域の農地の主力となっているが、一部で休耕田も生じてきている。大きな法面の草刈り等の管理も課題。



図表 5 柏原集落の中心施設である柏原公民館。施設の前には駐車場を兼ねた大きな土地があり、施設と合わせて交流イベント等に適した土地となっている。

⑤ 事業の実施体制／活用する地域の資源

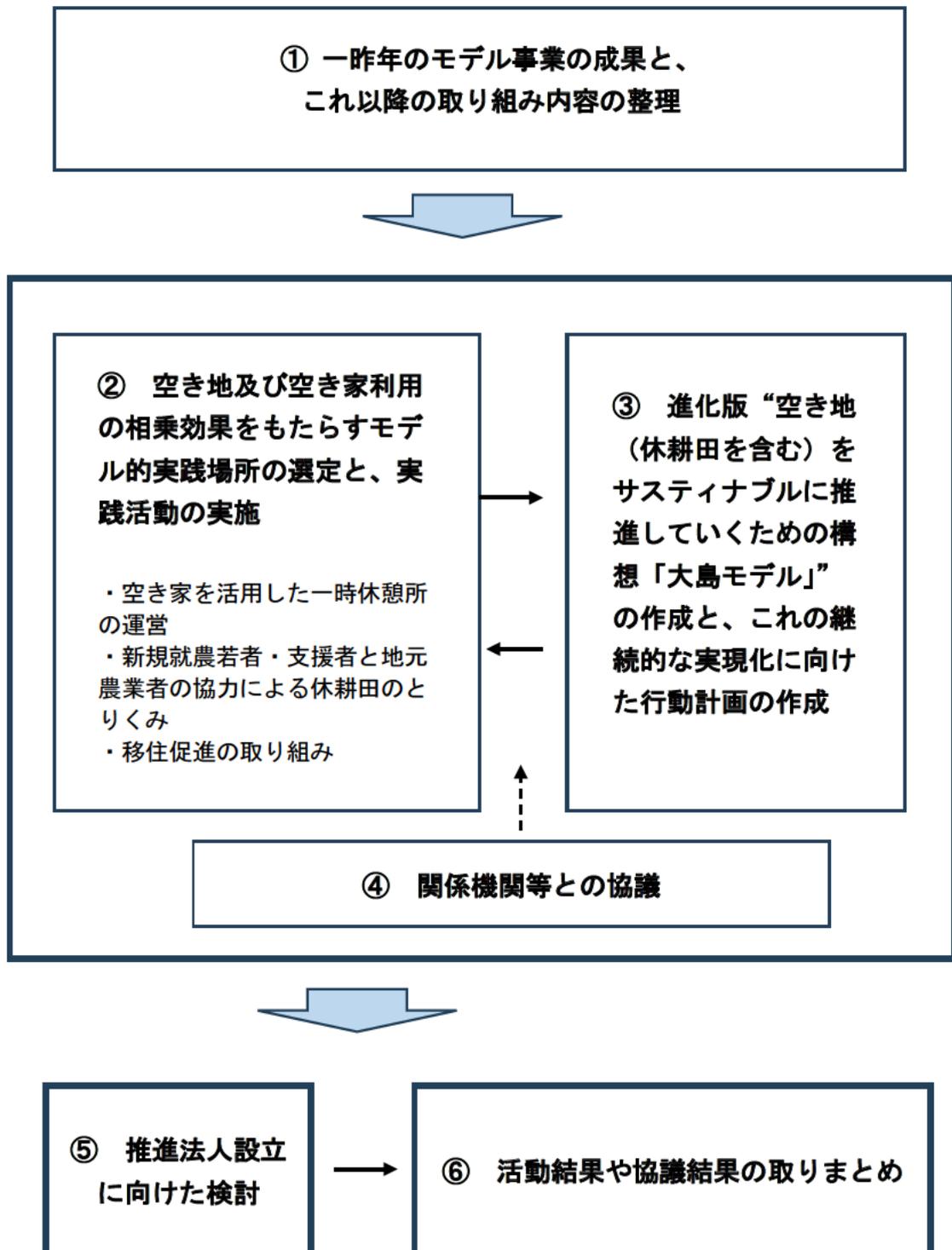
<事業の実施体制>

- ・当会事務局が、事業全体の事務作業及び事業のマネジメントを行う。
- ・事業内容の検討やモデル的な実践については、一昨年度から継続的に活動を行っているプロジェクトメンバーを軸に、専門協力者のサポートも得ながら行う。
- ・上記協議内容に関しては、必要に応じて先に述べた関係者等による協議を実施し、プロジェクトチーム等が検討した内容に関して協議を仰ぎ、実現可能性を高めていく。
- ・検討のとりまとめに関しては、専門性も要することから専門協力者の協力を得ながら実施する。

<活用する地域の資源>

- ・人／上記に述べた関係者はもとより、昨年就農した若者たちや、新たな地域住民、関係人口や移住候補者もできるだけ多くの獲得を目指して実施する。
- ・物／活用できる新たな空き地、空き家候補探しを行いながら活動を進める。協議場所としては、当該エリアの空き店舗や公民館を活用するとともに、関係機関等との協議は猪名川町役場で行う予定である。
- ・土地／休耕田となっている伝統的棚田のいくつかを活用するとともに、農地以外の空き土地のいくつかもバザール実施土地として活用する。若者農業者が利用している農地も適宜活用を行う。
- ・情報／当会 SNS（HP,facebook）を活用するとともに、募集チラシを作成して実践活動への参加を募る。
- ・地域の文化、イベント／大島地区では地域活動が猪名川町内で一番とあってよいほど活発である。これらのイベント等に際して、参加者等に PR を行い今回の事業への関心向上と参加を促し事業を行う。

(2) 業務フロー



図表 6 業務フロー

(3) 業務工程

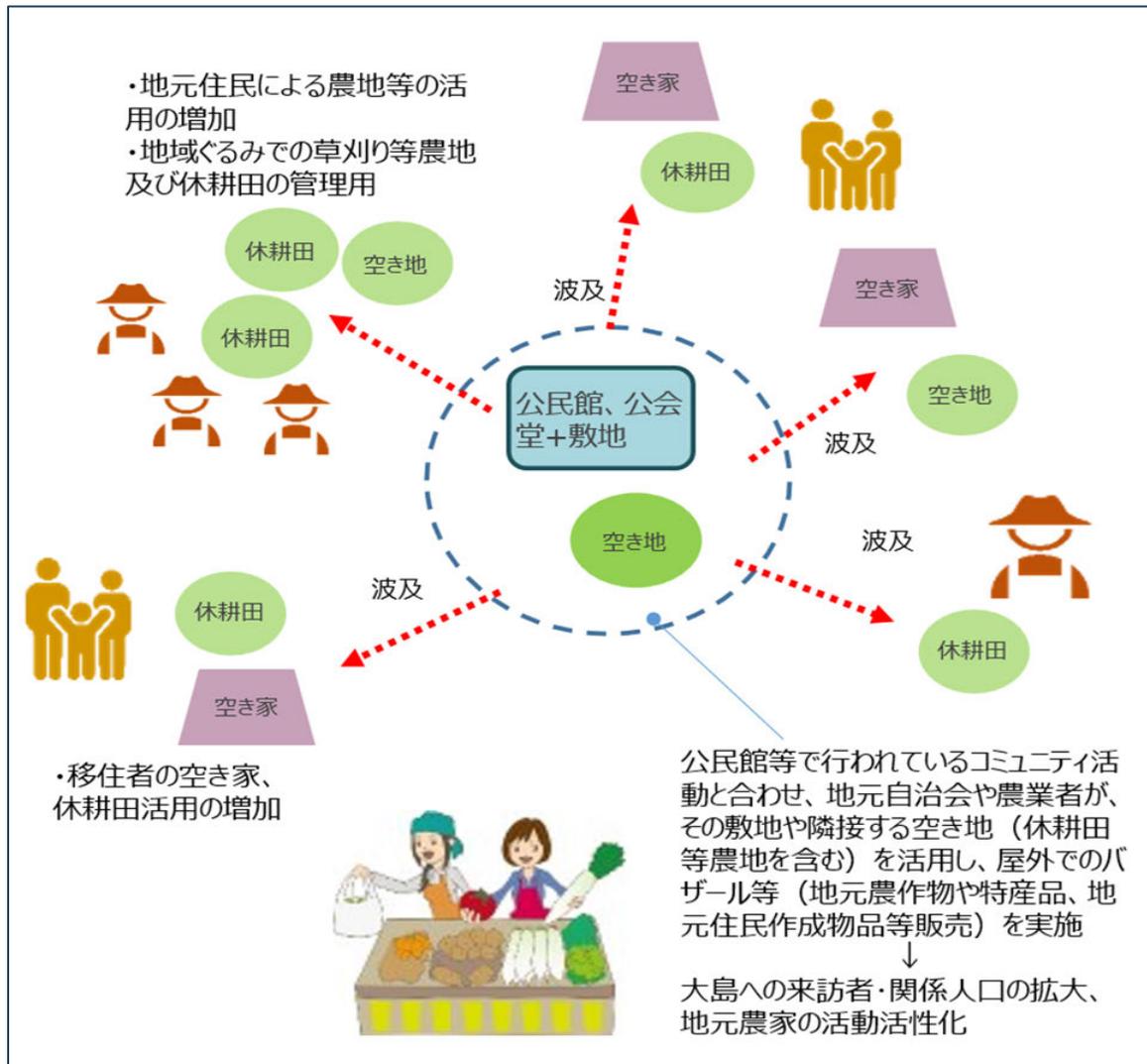
実施内容	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①一昨年のモデル事業の成果と、これ以降の取り組み内容の整理		■				
②空き地及び空き家利用の相乗効果をもたらすモデル的实践場所の選定と、実践活動の実施		■	■	■		
③進化版“空き地(休耕田を含む)をサステナブルに推進していくための構想「大島モデル」”の作成と、これの継続的な実現化に向けた行動計画の作成			■	■	■	
④関係機関等との協議			■	■	■	
⑤推進法人設立に向けた検討			■	■	■	
⑥活動結果や協議結果の取りまとめ					■	■

図表 7 業務工程

(4) 詳細な業務内容

■取組の全体像（事業スキーム）

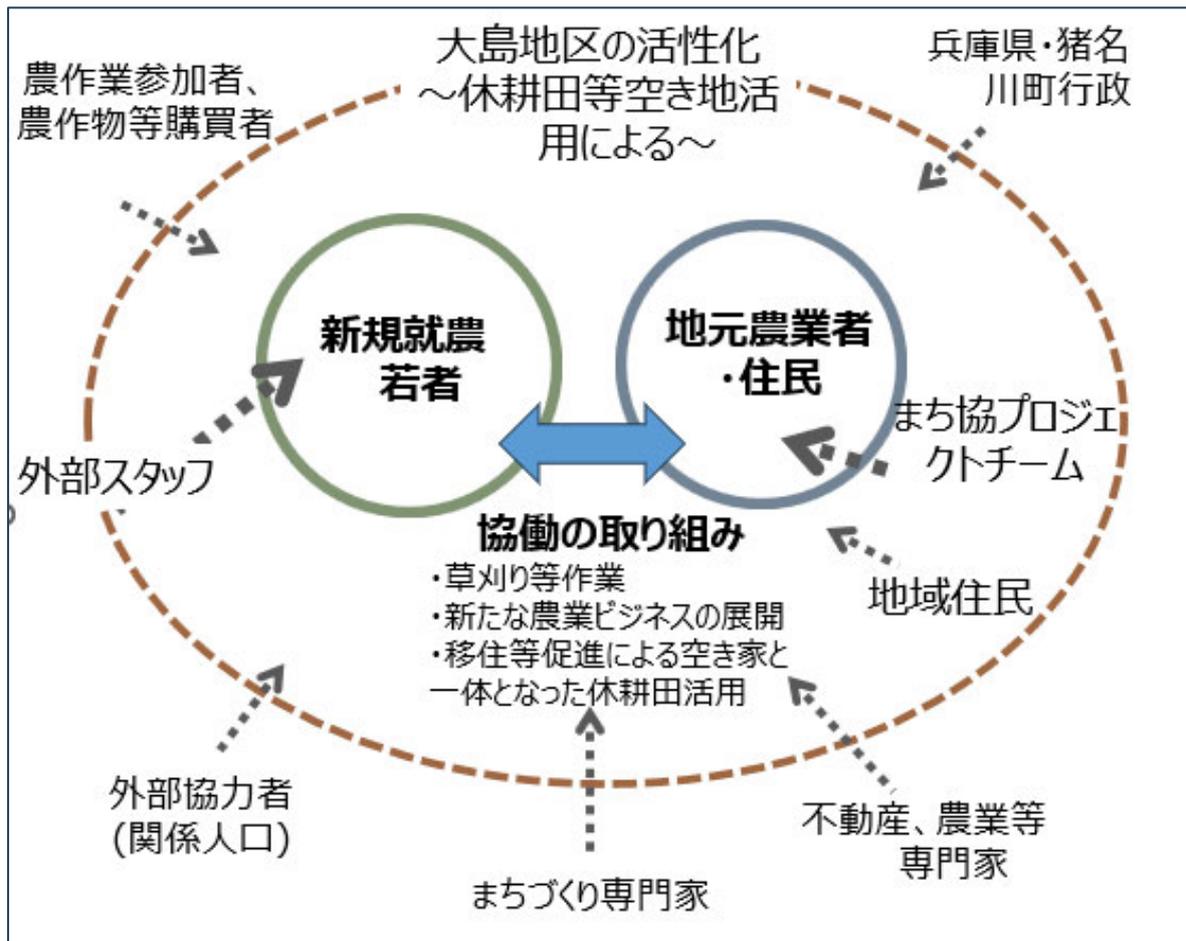
<p><事業の目的></p> <p>集落内の棚田農地などの未利用空き地の利活用と空き家とを組み合わせることで相乗的な効果をもたらすような実践的な活動を行い、これを今後継続化し未利用空き地の解消を目指すことで大島地区の地域再生につなげていく。</p> <p><取り組みの概要></p> <ol style="list-style-type: none"> ① 一昨年のモデル事業以降の取り組み内容の整理 ② 空き地及び空き家利用の相乗効果をもたらすモデル的实践場所の選定と、実践活動の実施 ③ 進化版“空き地(休耕田を含む)をサステナブルに推進していくための構想「大島モデル」”の作成と、これの継続的な実現化に向けた行動計画の作成 ④ 関係機関等との協議 ⑤ 推進法人設立に向けた検討
--



■休耕田等空き地活用による地域活性化のイメージ

- ・一昨年のモデル事業で提示
- ・このイメージを今後も堅持していくことを基本に、休耕田や集落内空き地の有効活用を、空き家活用とも連動させながら、地域住民・農業者と、新たな外部からの移住者や関係人口の方々と協力して進めていき、集落全体の維持・活性化を目指す。

図表 8 事業スキーム・1



- 新規就農者・外部スタッフと地元農業者・住民による協働の取り組み
- ・今回のモデル事業では、前ページで述べたイメージの具体化を提示した。
- ・新規就農の若者は、集落再生にとって“希望の星”であり、この機会をとらえて活動を一気に展開していく。
- ・

図表9 事業スキーム・2

① 11月9日(土) / 「大島フリマ」の実施

- ・R4年度モデル事業で、低利用公園の再生・活性化策として取り組み内容に掲げて実施した「大島フリマ」の継続的な実施。今回で通算4回目。
- ・毎年1, 2回の開催で、今後も定例開催される予定。



出店者募集 大島フリマ
11/9(土)
10時から15時まで
大島出会い公園にて開催

入場無料

出店者募集

区画: 3m×3m
店舗数: 10～15店 (先着順で受付、調整します)
販売品: 生もの・食品以外
(衣類・書籍・家具・手づくり品などOK)

注意事項:
①生もの・飲食関係はご連絡ください
②販売方法はお任せします。トラブルのないようにお願いします (すべて販売者の自己責任で処理)
③搬入搬出は小学校グラウンドに駐車してください
④場所のみの提供です

出店申込
LINEまたは電話で申し込んでください
電話: [REDACTED]
申込期限: 2024年10月末
※ただし定例により変更あり

野菜販売: [REDACTED]
キッチンカー: [REDACTED]
音楽出演: [REDACTED] ほか

主催
大島小学校区まちづくり協議会

図表 10 「大島フリマ」出展募集チラシと実施の様子

② 11月14日(木) / プロジェクトチーム会合

- ・一昨年のモデル事業の成果を参加者全員で改めて確認した。
- ・この成果に基づいたこれまでの活動について、整理してふりかえった。
- ・これらをベースに、申請内容に基づいた取り組み内容の具体化を話し合った。
- ・利用する休耕田に関しては、今年から地域に新規就農した若者が耕作している農地を活用。
- ・空き家に関しては、昨年度から所有者から借りて田舎暮らし体験活動を行っている空き家を活用。
- ・実施方法としては、新規就農若者の仲間、および出身大学の応援を得ながら、農業体験(冬野菜の収穫、農地法面の草刈り、来週に向けた耕作作業、他)、空き家を利用した宿泊体験を実施するとした。

- ・気候も考慮し、今年12月までをめどに実施することとした。
- ・結果としては、対象となる空き家は同じものを使用したがるが、来街者に対して空き家や地域の魅力をじっくりと味わってもらう「一時休憩所」としての活用を行った。



図表 11 空き家を活用した一時休憩所の開設

③ 11月21(木)／新規就農若者、地元世話人との会合

・プロジェクトチーム会合での検討に基づき、これを実践するために関係者との打ち合わせを行う。

・実施日時、大学関係者、地元参加などについて、新規就農若者がキーとなることから、彼の動きを待つて今後の対応を行うこととした。



図表 12 会合の様子

④ 11月中／プロジェクトチーム、新規就農若者による休耕田調査、休耕田耕作の実施

- ・11月当初より、休耕田調査、休耕田耕作を実施。
- ・休耕田調査に関しては、昨年度に県の支援により町と地元で行った地域計画の策定の取り組みの経験をふまえ、町所有のデータおよび現地調査により実態図を作成した。
- ・休耕田耕作に関しては、一昨年度よりプロジェクトチームで実施している休耕田活用の一環としての花畑化のための耕作及び新規就農若者による耕作を実施した。



図表 14 新規就農若者により休耕田を活用した耕作地

⑤ 12月12日(木)／プロジェクトチーム会合

- ・ 前回のプロジェクトチーム会合の内容を全員で確認。
- ・ そのうえで、プロジェクトチームを以下の3チームに分けて取り組むこととした。
 - A.主に空き地・休耕田に関わるチーム、B.空き家活用・移住に関わるチーム、C.これらへのサポートチーム
- ・ Aチームとしては早急に空き農地の実態把握や、空き農地を活用した交流の取り組みの段取りを新規就農若者と話し合い、協力者・出身大学等の参加などを決めることとした。
- ・ また、休耕田活用として、来年春に地域を彩る取組として菜の花を植えることとし、11月に耕作と種まきを行ったことが報告された。
- ・ Bチームとしては、上記に関連して空き家を活用の段取りを行うこととした。



図表 15 プロジェクトチーム会合の様子

⑥ 12月中旬～下旬/Aチーム打ち合わせ

- ・Aチーム及びコンサルタント、新規就農若者と、適宜リモート等で協議した。
- ・内容としては、取り組みの候補日を1月19日（日）及び26日（日）とし、実施内容としては農作物収穫体験及び草刈り体験とし、また参加者としては出身大学では試験期に入ることから可能な限りの参加を目指すこととした。

⑦ 1月18日（土）／新規就農若者、協力者と地元住民による草刈り体験及び交流会の実施

- ・柏原集落の休耕田（約1反）において、茅刈り体験を実施。
- ・参加者は、新規就農若者とその協力者4名（20代後半から30代前半）、地元住民及び事務局6名、コンサルタント計12名。
- ・茅刈りは草刈りよりも重労働で、新規就農若者の協力者になかには次初めて草刈り機を操作する者もいて、貴重な体験会となった。
- ・茅刈り後、参加者全員で交流会を実施。特に新規就農若者・その協力者との話し合いでは、当地に多数存在している休耕田を活用して効果的な農業ビジネスを自ら起こしていくことで、地域に貢献していくことが話し合われた。

大島地域での活動に参加しませんか？ **参加者募集**

草刈り + 交流イベント

大島地域のみんなと交流しよう！

休耕田の畔などを草刈り体験。
草刈りのあとは大島の人々と交流しながら、地域の良さ、課題などを実際に知っていただく機会として開催します
ぜひご参加ください

2025
1/18 SAT
雨天中止
10:00~13:00

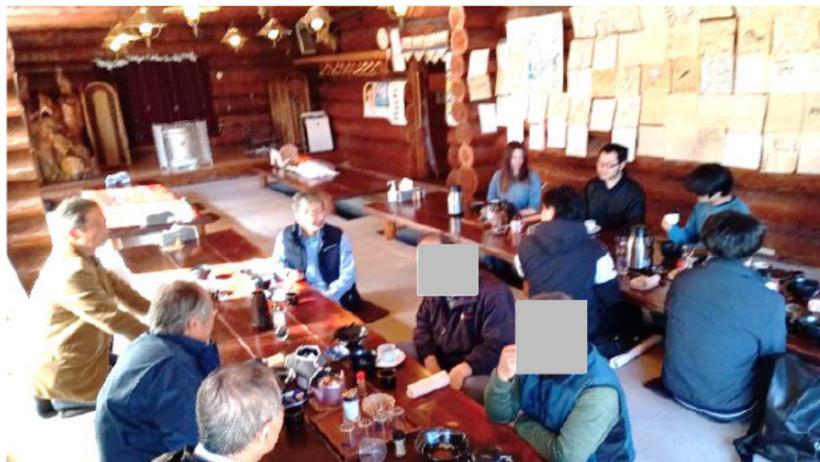
場所
猪名川町柏原の休耕田
集合：柏原公民館
猪名川町柏原字福井19(Pあり)
動きやすい服装でお越しください
持ち物：タオル・軍手・水分・帽子
※お子様には必ず保護者が同伴してください
参加のお申込み▶電話／

主催
大島小学校区まちづくり協議会

図表 16 草刈り+交流イベント参加募集チラシ



図表 17 草刈りイベントの様子。草刈りと銘打っているが、実際は茅で、たいへんな重労働である。右は草刈り前と草刈り後。



図表 18 草刈り後の交流イベントの様子

⑧ 1月21日（火）／プロジェクトチーム会合

- ・ 1/18の茅狩り体験及び交流会の内容報告。
- ・ 第2回目の農業体験・交流会を実施すべく、主に空き地・休耕田に関わるAチームを軸として行うこととし、地域外の協力者も交えて協議を行うこととした。

⑨ 1月26日（日）／第3回「大島移住サミット」の開催

- ・ “移住”をテーマとして大島地区全体の活性化の取り組みで、今回で3回目。Aチーム、新規就農者も参加。今回は、移住に関連する町行政関係課、外部の民間の移住を支援する方々など幅広い方面からの参加があった。
- ・ 休耕田等空き地の取り組みは、トータルな大島地区の地域活性化の取り組みと密接に関連するとの考えから、参加者に今回の取り組み内容や意義を伝える場となった。



図表 19 「大島移住サミット」の様子

⑩ 2月16日（日）／Aチーム＋地区外協力者協議

- ・ 今年度の取り組みのふりかえり総括と、来年度に向けて休耕田活用のさらなる発展について思いを出し合い、今回のモデル事業の成果を多くの地元住民・農業者、地区外協力者とも共有化しながら来年度も進めていくことを話し合った。

⑪ 2月17日（月）／プロジェクトチーム会合

- ・ 2月21日に東京で当モデル事業の最終報告会があることをふまえ、報告内容の共有化を行った。
- ・ 報告内容の具体化の一つとして、コンサルタントより休耕田利用の展望が示され話し合うとともに、これをもとに今後も継続しながら具体化を計画していくこととした。

業務の成果と課題

⑥ 本業務で得られた成果・知見

<各取り組みを通しての成果・知見について>

■11・9「大島フリマ」実施に関して

- ・一昨年度の実施より継続実施中。低利用の地域中心に立地する公園である大島出合い公園のイベントとして定着化した。
- ・これに伴い、今年度兵庫県のイベントであるロードレースの起終点として使われるなど、利用拡大が感じられるようになった。

■11・14 プロジェクトチーム会合に関して

- ・今回の申請内容に沿った具体的実施に関する協議を行い、新規就農若者と協議して年内には実施することを決めることができた。
- ・休耕田活用を含む地域空き地利用と空き家の促進につながる取組として、今年度で3回目となる「大島移住サミット」（今年度1月ごろに実施予定）という取り組みと連動させて取り組んでいくことを決めることができた。

■11・21 新規就農若者、地元世話人との会合に関して

- ・今後の具体的な取り組みに関して、キーマンとなる新規就農若者と打ち合わせを行うことができた。
- ・実際に活動している農地を見学し、具体的な今後の取り組みについてイメージすることができた。

■12・12 プロジェクトチーム会合に関して

- ・取り組みを効率的に行うために、プロジェクトチームをさらに小チーム分けして取り組みことを決めることができた。
- ・11月に春に咲く菜の花畑の耕作と種まきを実施した。

■12月中下旬実施のAチーム打ち合わせに関して

- ・実施予定の体験イベントに関して、前回プロジェクトチーム会合で決めた今年中の実施はかなわなかったが、1月に実施することを決めることができた。
- ・体験イベント参加スタッフが遠隔地で勤労者であることから、会合の予定が合わない中でもリモートで打ち合わせを行うことができた。

■1・18 新規就農若者、協力者と地元住民による草刈り体験及び交流会に関して

- ・地域住民以外の多くの方々の協力により、長らく耕作が放置され、草刈り等の管理が課題

となっている休耕田を、比較的短時間に整備を行うことができた。

・新規就農者及びその協力者といった、少し前までは当地域にいなかった人々の力が休耕田対策には有効であることが、わずかな取り組みではあるもののその一端を実証することができた。また、本取組より、事業化に向けた具体的な検討を進めるきっかけとなった。

<取組全体を通しての成果・知見について>

■休耕田の実態把握

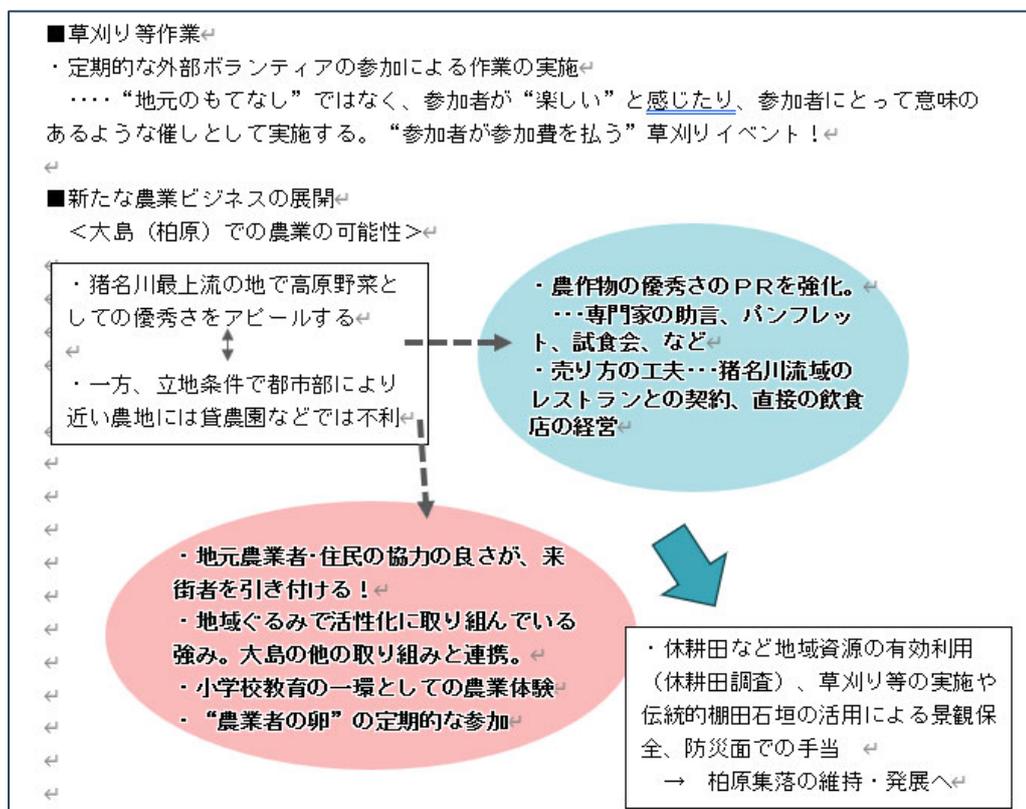
・今回のモデル事業の対象エリアである柏原集落における休耕田の全体像把握の第一段として、休耕田調査図を作成することができた。

・今後、地域住民・農業者の聞き取りやさらなる現地調査により、これらの活用に向けた取り組みを進めていくことが求められている。

■休耕田管理の“協働作業”実施による休耕田解消による集落再生・活性化の第一歩

・昨年度に当集落に京都から新規就農した若者とその協力者、地元住民・農業者の協働作業、交流会が行われた。これは、事業スキームで描いた内容の実現化の一歩であり、これにより今後何を行っていくべきか、さらには集落の維持・再生の展望の一端も見ることができた。

・以下の内容は、今回の取り組みのまとめ的な内容であり、これをもとにさらなる具体化を図っていくことが期待される。



図表 20 来年度に向けた休耕田活用の一提案

⑦ 今後の課題

一昨年の当モデル事業で組織したプロジェクトチームをほぼそのまま今回の取り組みで適用することができた。一方、地区外協力者やプロジェクトメンバー以外の地域との参画方法はまだ実験的な段階であり、これを確立していく必要がある。

(5) 今後の取組予定・見通し

来年度以降の活動イメージとしては、新規就農若者・その協力者は今回の取り組みでは“準スタッフ”的な位置づけだったが、来年度以降はよりグレードアップしたかかわりの中で活動してもらうことが考えられる。また、来年度以降あまり間を置かず今回の取り組みを延長する形で活動を継続化していくことで、とりくみを成長させていくことが考えられる。

(6) 分析・提言等

・今回の取り組みは、一中山間地域の集落における休耕田活用による集落維持・再生に向けた“小さな”取り組みである。

・昨今話題となっているわが国の“コメ不足”の問題は、様々な面で考えさせられることが多く、究極的には我が国の食料安全保障にもつながると考えざるを得ない。我が国のコメ生産は約40%を中山間地域が担っている。これまでは地域の農業者のみが担い手になってきたわけであるが、昨年度に当集落で策定された地域計画では、10年後、20年後の担い手不足は顕著で、全国の中山間地域もほぼ同様と考えられる。

・農業の多面的な機能を考えるに、今回モデル事業で実践したように、外部人材が関わること、しかもこれらの方々が楽しく意義深く関わってもらうことに意味があるように感じられる。この取り組みを継続的に工夫しながら十分に遂行していくことで、目標とする柏原集落の維持・発展を成し遂げるとともに、この経験を全国モデルとして我が国の中山間地域の維持・発展に何らかのお役に立てることができるよう期待したい。